

日本産コケ付着ケイソウ(4)

安藤 一 男

埼玉県立豊岡高等学校 (358 入間市豊岡 1-15-1)

ANDO, K. 1981. Moss diatoms in Japan (4). Jap. J. Phycol. 29: 201-207.

In the present paper, six moss diatoms collected from various localities in Japan are discussed from the taxonomical and autoecological viewpoint. These are *Terpsinoe musica*, *Diatomella balfouriana*, *Navicula hambergii*, *Pinnularia intermedia*, *P. obscura* and *Amphora normanii*. The fine structure of *Terpsinoe musica* is studied using scanning electron microscopy.

Key Index Words: *Amphora normanii*; *Diatomella balfouriana*; moss diatoms; *Navicula hambergii*; *Pinnularia intermedia*; *Pinnularia obscura*; taxonomy; *Terpsinoe musica*.

Kazuo Ando, Toyooka Senior High School, Toyooka, Iruma-shi, Saitama-ken, 358 Japan.

(28) *Terpsinoe musica* EHR.; HUST. Kies. 1: 898. f. 540. 1927-1930. (Figs. 1-6. and 7-9)

HUSTEDTによると、縦軸約35—250 μm、横軸25—50 μm となっているが、本邦産の個体の測定値は縦軸109—128 μm、横軸36—47 μm であり、記載されているような大型の個体は見出せなかった。殻面を外側から見た電顕像を Figs. 2, 5, 6 に示したが、殻壁は、胞紋の底が単孔をもつ師板となっている偽小箱 (pseudoloculus) 構造をしていることがわかる。この構造は CHIA-WEI and YOUNG-MENG (1977) が示した *Hydrosera triquetra* の殻壁構造と同様のものである。また、殻の中央部近くの1つの胞紋の底は唇状の形態を示す (Fig. 5) が、これは唇状突起の外部への開口である。これを内側から見た電顕像が Fig. 9 であるが、当種の唇状突起はまゆ形状に突出し、その中央部には斜めに走る裂口が存在する。Figs. 1, 3, 4, 8 を比較すると、光顕下で横軸にはほぼ平行に見える肋線は、膜状の偽隔壁があるためであり、この偽隔壁の先端は彎曲していることがわかる。

HUSTEDT (1937) は西ジャバで、流水中の石や、水が滴る壁面のコケから当種を見出し、その生態性について「当種は水でうるおされている岩面を特に好んで生育する。このためその生態性は多分 *Hydrosera triquetra* や *Biddulphia pangeroni* と類似するも

のである」と記している。今回の調査では、本土ではまったく見出せなかったにもかかわらず、小笠原諸島ではコケ付着の状態ではしばしば豊富に見られた。当種に関する記録としては、セイロン (SKVORTZOW 1930) フィリピンのルソン島やハワイのオアフ島、カウアイ島 (HUSTEDT 1942)、シナイ半島 (HUSTEDT 1949)、カリブ海のグアドループ島 (MANGUIN 1952) などがある。このうちシナイ半島の記録はハリガネゴケから見出されたものである。これらのことから判断すると、当種は亜熱帯ないし熱帯地域に分布し、また、コケ付着のような状態でもよく生育するものと思えた。——東京都小笠原〔湿岩上のオオサワゴケ *Philonotis turneriana* (SCHWAEGR.) MITT.〕。

(29) *Diatomella balfouriana* GREV.; HUST. Bacill. 214. f. 312. 1930. (Figs. 10, 11, 15)

中間帯は Fig. 10 のように穴が3つあいている隔壁をもつのが当種の特徴で、このため帯面観では中間帯の部分は Fig. 15 のような独特の模様を示す。縦溝は糸状で、中心孔は互に離れている。

FOGED (1959) は貧塩—不定、pH—不定、好気性で、泉や滝など急速に流れ、よく換気されている水域の指標種であるとし、HUSTEDT (1962) は「湿ったコケや水でうるおされている岩上に広く分布するが、石灰岩上には存在しないようにみえる」と記している。また、PATRICK and REIMER (1966) は「山岳地域でし

ばしば見られ、冷水を好む」と記している。本邦では HUSTEDT (1927) によって青木湖から、岩城 (1956, 1968) によって豊平川と五十鈴川から、奥野・黒沢 (1959) によって三段峡からすでに報告されている。これらのうち、特に三段峡にあつては、シノブゴケ *Thuidium yezoanum*, オオトラノオゴケ *Thamnium sandei*, マルバハネゴケ *Plagiochila ovalifolia*, オオバチ ヨウチンゴケ *Mnium maximowiczii*, ジャゴケ *Conocephalum conicum* からの優勢な出現が報告されている。本調査でも次に示すように多くの地域のコケから見出されたが、特に、ホソバミズゼニゴケとホウオウゴケの仲間から見出されることが多かった。好気性で、コケに付着した状態でもよく繁殖し得るものと思ふ。——埼玉県十文字峠〔濡岩上のツボゴケ *Plagiomnium cuspidatum* (HEDW.) KOP.〕, 埼玉県麻生〔湿岩上のアサイトゴケ *Pseudoleskeopsis japonica* (SULL. et LESQ.) IWATS.〕, 埼玉県中津峡〔濡岩上のオオバチ ヨウチンゴケ *Plagiomnium vesicatum* (BESCH.) KOP., 水が滴り落ちている岩面のホソバミズゼニゴケ *Pellia endiviaefolia* (DICKS.) DUM., 湿土上のジャゴケ *Conocephalum conicum* (L.) DUM., および、湿岩上のチビッコホウオウゴケ *Fissidens minutulus* SULL.〕, 埼玉県名郷〔濡岩上のジャゴケ〕, 埼玉県久須美〔濡岩上のタチチ ヨウチンゴケ *Orthomniopsis dilatata* (MITT.) NOG.〕, 埼玉県有間谷〔湿土上のジャゴケ, 湿岩上のハネゴケの仲間とナガヒツジゴケ *Brachythecium buchananii* (HOOK.) JAEG.〕, 千葉県三石山〔濡れた泥岩壁のホソバミズゼニゴケ〕, 千葉県清澄山〔湿岩上のシノブゴケ属の一種 *Thuidium* sp.〕, 東京都日原〔濡岩上のコスギゴケ *Pogonatum inflexum* (LINDB.) LAC. とコクシサワゴケ *Philonotis socia* MITT.〕, 神奈川県丹沢山〔空中に垂れ下っている濡れたジャゴケと水が流れている岩面のマキノゴケ *Makinoa crispata* (STEPH.) MIYAKE〕, 静岡県船原川沿いの山地〔水が滴る空中に垂れ下っているホソバミズゼニゴケ, 濡岩上のホソバミズゼニゴケとスズゴケ *Forsstroemia trichomitria* (HEDW.) LINDB.〕, 静岡県浄蓮の滝〔水が流れる石垣上のホソホウオウゴケ *Fissidens grandifrons* BRID. var. *planicaulis* (BESCH.) NOG. と、湿土上のシノブゴケの一種〕, 静岡県カニ滝〔水が滴る岩面のコホウオウゴケ *Fissidens adelphinus* BESCH.〕, 静岡県下賀茂〔濡れたコンクリート壁のスズゴケ〕, 静岡県子浦〔濡岩上のコホウオウゴケ, ジャゴケ, チジミクチヒゲゴケ *Trichostomum crispulum* BRUCH

および、カマサワゴケ *Philonotis falcata* (HOOK.) MITT.〕, 静岡県初景滝〔濡岩上のヒメシノブゴケ *Thuidium cymbifolium* (DOZ. et MOLK.) DOZ. et MOLK.〕, 静岡県釜滝〔濡岩上のホソバミズゼニゴケとコホウオウゴケ〕, 静岡県猫越川沿いの山地〔濡岩上のアサイトゴケ〕, 静岡県万城の滝〔湿岩上のホウオウゴケ *Fissidens japonicus* DOZ. et MOLK.〕, 静岡県娑婆羅峠〔湿岩上のタニゴケ *Brachythecium rivulare* B. S. G.〕, 三重県御在所山〔湿岩上のツクシナギゴケ *Eurhynchium polystictum* PAR.〕, 徳島県祖谷溪〔濡岩上のホソバミズゼニゴケ〕。

(30) *Navicula hambergii* HUST. Naturw. Untersuch. d. Sarekgeb. in Schwed.-Lappl. 3: 562. pl. 17, f. 2. 1924; SCHMIDT, Atlas pl. 400. f. 12-15. 1934. (Figs. 12-14)
Synonym *Navicula quadripartita* HUST.

中央の条線が長く伸び、その両側の条線は極めて短いため、殻の中央部は十字形の模様を示すのが当種の特徴である。軸域は披針形であるが、中央部でわずかに狭くなる。当種に類似の種類として *Navicula paanaensis* A. C-E. があるが、当種の殻端はわずかに嘴状に突出するのに対し、*N. paanaensis* のは突出しないこと、および、軸域の形の違いによって区別できる。また、当種は CHOLNOKY (1957) が記載した *Navicula anassae* にも類似する。しかし、当種の条線配列は中央部で粗、殻端で著しく密となるのに対し、*N. anassae* のは中央と殻端で条線配列の粗密にあまり差がないので区別できる。PATRICK and REIMER (1966) や、VANLANDINGHAM (1975) は HUSTEDT (1937) が原記載した *Navicula quadripartita* を *N. hambergii* の Synonym とした。両種の原記載、および、その説明図を比較検討してみると、*N. hambergii* の条線配列の方がわずかに密であるが、このこと以外は相違が認められなかったので VANLANDINGHAM らの見解に従った。

HUSTEDT は当種の生態性について「貧塩性、好気性で、なかでも水辺のコケのマットで特によく生育する。最適 pH 範囲は 7-7.5 である」と記している。また、PATRICK and REIMER も「コケのはえている水辺の岩上を好む」としている。当種に関する報告は本邦からはないようであるが、今回の調査では次に示すような地点でしばしば見られた。コケ付着の状態でも広く分布しているものと思われる。——福島県赤川〔湿土上のツルチ ヨウチンゴケ *Plagiomnium maximoviczii* (LINDB.) KOP.〕, 新潟県湯沢〔湿土上の群類〕,

埼玉県中津峡〔湿岩上のジャゴケ *Conocephalum conicum* (L.) DUM.〕, 千葉県清澄山〔湿岩上のミヤマサナダゴケ *Plagiothecium nemorale* (MITT.) JAEG. と, 乾いた岩上のヒツジゴケの仲間〕, 静岡県娑婆羅峠〔湿岩上のシノブゴケ属の一種 *Thuidium* sp.〕, 静岡県釜滝〔濡岩上のホソバミズゼニゴケ *Pellia endiviaefolia* (DICKS.) DUM.〕, 徳島県祖谷溪〔濡れた木材上のサワゴケ *Philonotis fontana* (HEDW.) BRID.〕。

(31) *Pinnularia intermedia* (LAGST.) CL. Kgl. Sve. Vet.-Akad. Handl. 27 (3): 80. 1895; PATRICK and REIMER, Diat. U.S. 1: 617. pl. 58. f. 10. 1966. (Figs. 19, 20)

CLEVE は殻形について線状随円形と記しているが, PATRICK & REIMER は, 殻は線形でその殻側は中央でわずかに凹むとしている。本調査で得られた個体の殻形はいずれも線形であった。BOCK (1975) や CLEVE は当種を *Distantes* 節, FOGED (1959) は *Capitatae* 節, PATRICK & REIMER や LUND (1946) は *Divergentes* 節としてそれぞれ扱っている。筆者は次の *P. obscura* とともに *Divergentes* 節に含めるのがよいと考えている。

Foged は当種の生態性を貧塩—不定, pH—不定としている。PETERSEN (1935) はデンマークと東グリーンランドの土壤藻のリストに当種をあげるとともに, この種類はハンガリー, スウェーデン, フィンランド, そして, ノールウェイでも森林土壌中から見出されていると記している。また, LUND は英国の土壤ケイソウを調査して, 当種は最も普通な土壤ケイソウの1つであることを確認している。本邦では福島 (1950) によって埼玉県新河岸川々跡沼から報告されているが, これ以外の記録はないようである。しかし, 本調査では下記に示すように, 主として湿岩上や濡岩上のコケに広く分布していた。また, 乾藻に近い状態のコケからも見出されている。土壌やコケ附着のような環境を特に好む種類と思われる。——埼玉県熊倉山〔湿岩上のミヤマサナダゴケ *Plagiothecium nemorale* (MITT.) JAEG.〕, 埼玉県中津峡〔湿岩上のアサイトゴケ *Pseudoleskeopsis japonica* (SULL. et LESQ.) IWATS. と, 湿岩上のジャゴケ *Conocephalum conicum* (L.) DUM.〕, 埼玉県麻生〔溪流に洗われている岩上のツクシナゴケモドキ *Eurhynchium hians* (HEDW.) S. LAC.〕, 東京都日原〔乾いた岩上の藓類〕, 東京都川苔谷〔溪流の水面上に出ている岩上の藓類〕, 神奈川県丹沢山〔湿岩上のアサイトゴケと, 湿岩上のヨ

コグラハネゴケ *Plagiochila yokogurensis* STEPH.〕, 静岡県船原川沿いの山地〔湿岩上のホソバミズゼニゴケ *Pellia endiviaefolia* (DICKS.) DUM.〕, 静岡県エビ滝付近〔湿岩上のシノブゴケ属の一種 *Thuidium* sp.〕, 静岡県子浦〔乾いた岩上のナメリチョウチンゴケ *Mnium laevinerve* CARD.〕, 静岡県娑婆羅峠〔湿岩上のシノブゴケ属の一種〕。

(32) *Pinnularia obscura* KRASSKE, Hedwigia 72: 117. pl. 3. f. 22. 1932. (Figs. 21-23)

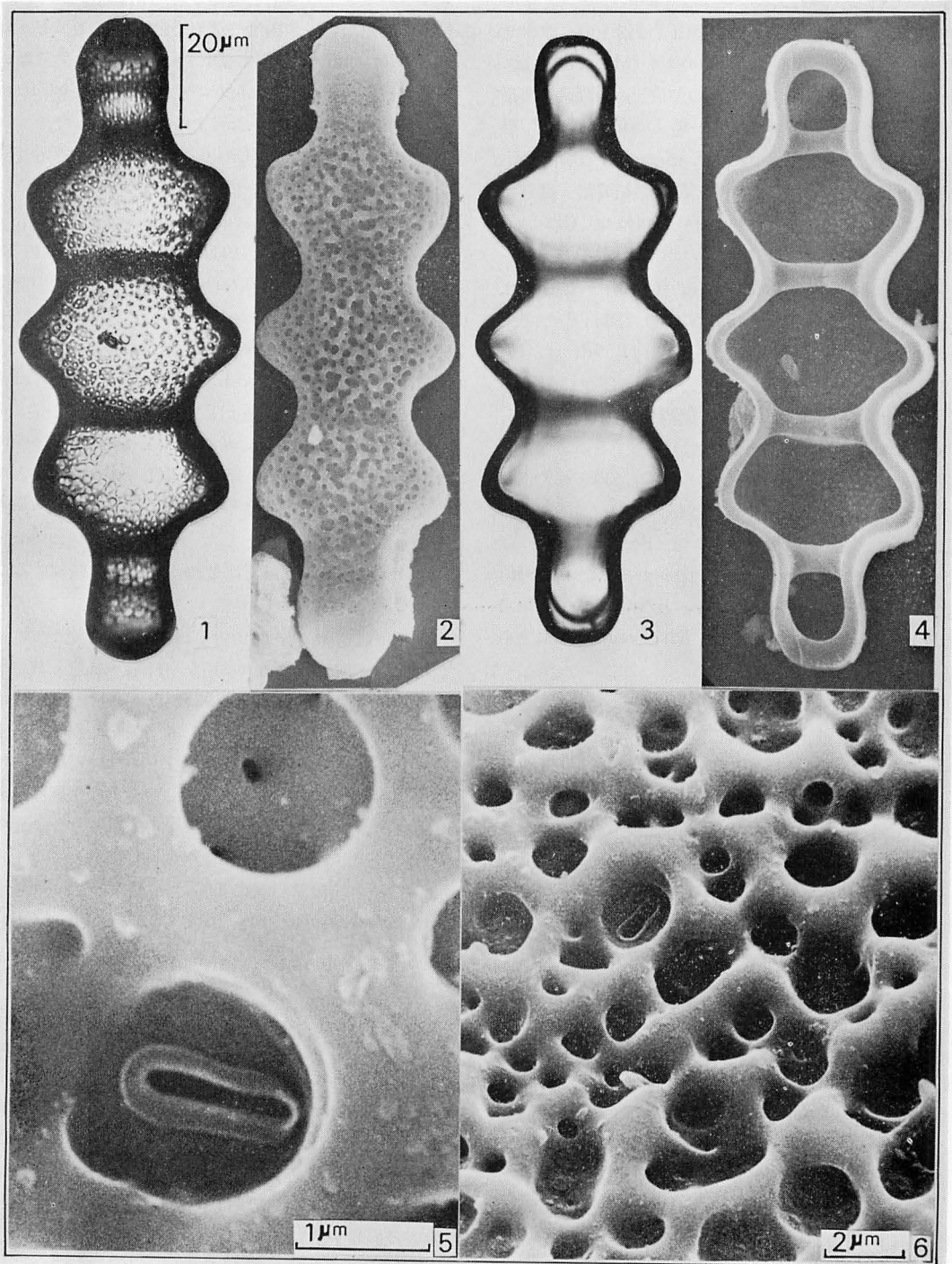
当種は *Pinnularia intermedia* と非常に近い関係がある。この場合, LUND (1946) はこの両者を同一分類群とし, *P. obscura* を *P. intermedia* の中に含めている。しかし, VANLANDINGHAM (1978) は両者をそれぞれ独立の種として扱い, PATRICK and REIMER (1966) は, *P. obscura* の方が小型で条線配列も密であり, また, 殻端の条線は強い逆放射となることで両者は区別できるとしている。筆者が本調査で得られた個体を精査したところ, PATRICK and REIMER の見解に従って, 2つの分類群に識別することができた。

当種は最初アルプス山中の湿った崖のタマゴケ (*Bartramia pomiformis*) から採取され原記載された。その後, PETERSEN (1935) はデンマークと東グリーンランドの土壤藻を調査して当種を見出し, 真土壌性ケイソウとして報告した。HUSTEDT (1957) は水面にあるコケから当種を見出した。その生態性は貧塩—不定, pH—不定としている。本調査では下記の所から見出されたが, その出現量はいずれも少なかった。——神奈川県丹沢山〔濡岩上のアサイトゴケ *Pseudoleskeopsis japonica* (SULL. et LESQ.) IWATS.〕, 静岡県船原川沿いの山地〔水が滴る崖面のジャゴケ *Conocephalum conicum* (L.) DUM.〕, 静岡県下賀茂〔濡れた岩壁面のヤノネゴケ *Bryhnia novae-angliae* (SULL. et LESQ.) GROU〕, 静岡県娑婆羅峠〔湿岩上のシノブゴケ属の一種 *Thuidium* sp.〕。

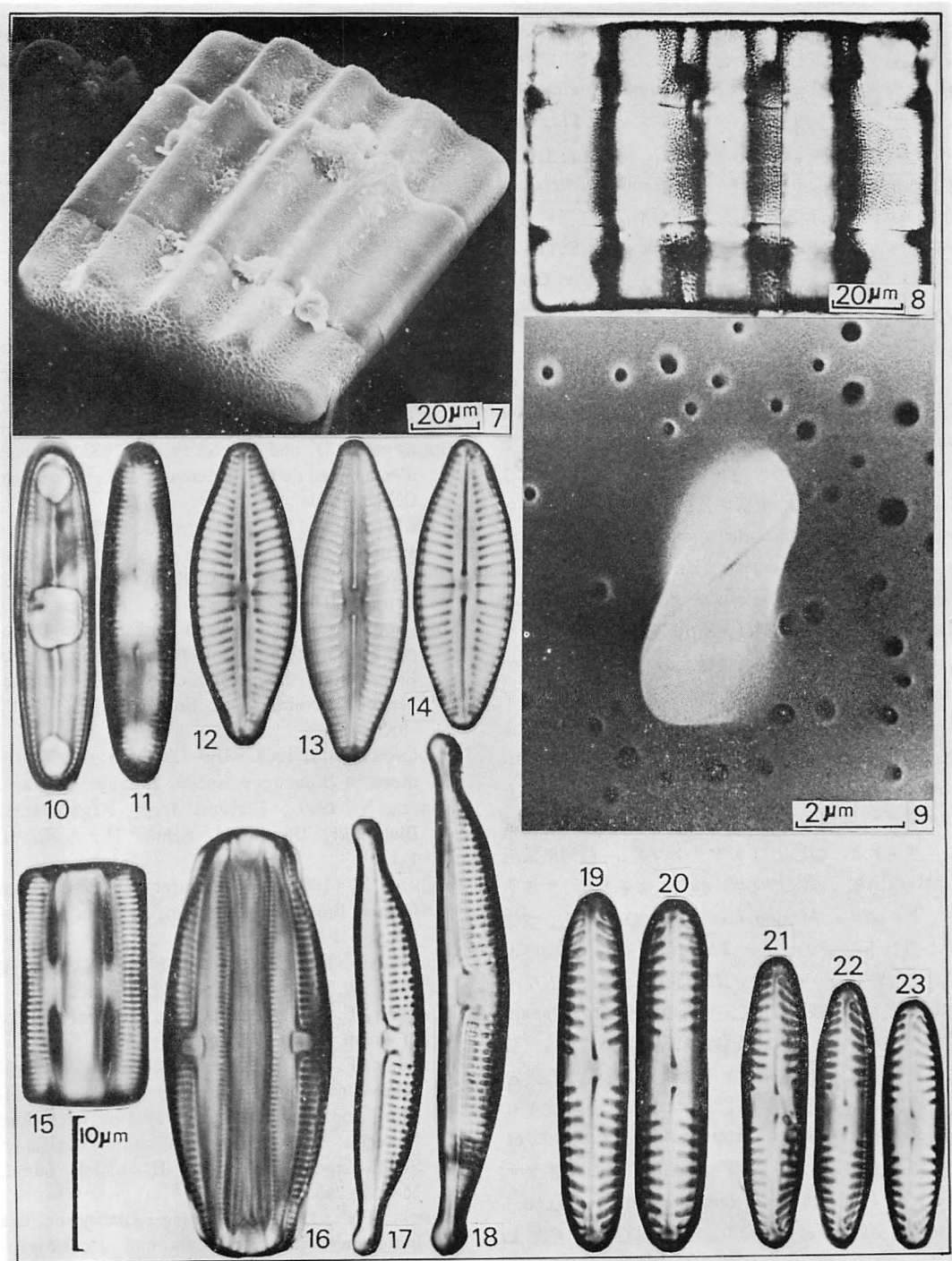
(33) *Amphora normanii* RABH.; HUST. Bacill. 343. f. 630. 1930. (Figs. 16-18)

HUSTEDT は殻長 16—40 μm , 被殻幅 10—14 μm としているが, 本調査では殻長 48 μm , 被殻幅 17 μm ほどの個体も見出されている。

当種の生態性について FOGED (1964) は貧塩—嫌塩, pH—不定性, 主に山岳地域の流水中のコケで見出されるとし, HUSTEDT (1957) は好気性で, 水でうるおされている藓類で特によく生育するとしている。今回の調査でも次に示すように多くの所で見出された



Figs. 1-6. *Terpsinoe musica* EHR.



Figs. 7-9. *Terpsinoe musica* EHR. Figs. 10, 11, 15. *Diatomella balfouriana* GREV. Figs. 12-14. *Navicula hambergii* HUST. Figs. 16-18. *Amphora normanii* RABH. Figs. 19, 20. *Pinnularia intermedia* (LAGST.) CL. Figs. 21-23. *P. obscura* KRASSKE.

が、特に、鐘乳洞中の湿った石灰岩上のコケから豊富に見出されることが多かった。好気性でコケ付着のような環境を特に好むものと思われる。——埼玉県中津峡〔湿岩上のタニゴケ *Brachythecium rivulare* B. S. G. と、濡岩上のオオバチョウチンゴケ *Plagiomnium vesicatum* (BESCH.) KOP.〕、埼玉県麻生〔湿岩上のナガミチョウチンゴケ *Aulacomnium heterostichum* (HEDW.) B. S. G.〕、埼玉県有間谷〔湿岩上のアサイトゴケ *Pseudoleskeopsis japonica* (SULL. et LESQ.) IWATS. と、水が滴る岩面のジャゴケ *Conoccephalum conicum* (L.) DUM.〕、埼玉県久須美〔乾いた岩上のセンボンゴケの仲間と、湿岩上のエダウロコゴケモドキ *Fauriella tenuis* (MITT.) CARD.〕、神奈川県丹沢山〔濡岩上のタチチョウチンゴケ *Orthomniopsis dilatata* (MITT.) NOG. と、湿った倒木上のホンシノブゴケ *Bryonoguchia molkenboeri* (LAC.) IWATS. et INOUE〕、東京都日原〔湿岩上のヒメロゴケ *Pterobryum arbuscula* MITT. と、ヒメヤナギゴケ *Amblystegium serpens* (HEDW.) B. S. G.、水が滴る岩面のホソバミズゼニゴケ *Pellia endiviaefolia* (DICKS.) DUM.〕、千葉県三石山〔濡れた泥岩壁のジャゴケ〕、千葉県清澄山〔濡岩上のチョウチンゴケ *Mnium* sp.〕、静岡県釜滝〔水が流れる石垣のコカヤゴケ *Rhynchostegium pallidifolium* (MITT.) JAEG.〕、静岡県子浦〔濡岩上のコホウオウゴケ *Fissidens adelphinus* BESCH.〕、静岡県娑婆羅峠〔湿岩上のタニゴケ〕、静岡県土肥〔水が滴るコンクリート壁のタニゴケと、湿岩上のアサイトゴケ〕、静岡県猫越川沿いの山地〔濡岩上のホソホウオウゴケと、ナメリチョウチンゴケ *Mnium laevinerve* CARD. と、空気中に垂れ下るシノブゴケ *Thuidium* sp.〕、静岡県エビ滝〔湿岩上のハマキゴケ *Hyophila propagulifera* BROTH.〕、静岡県下賀茂〔湿岩上のハイゴケ *Hypnum plumaeforme* WILS.〕、岐阜県飛騨鐘乳洞〔湿った石灰岩上の蘚類〕、岐阜県関ヶ原鐘乳洞〔湿った石灰岩上の蘚類〕、山口県秋芳洞〔湿った石灰岩上のツボゼニゴケ *Plagiochasma intermedium* LINDENB. et GOTT.〕、山口県大正洞〔湿った石灰岩上のミヤマサナダゴケ *Plagiothecium nemorale* (MITT.) JAEG.〕、徳島県大步危〔湿岩上の蘚類〕、徳島県祖谷溪〔濡岩上のコツボゴケ *Plagiomnium trichomanes* (MITT.) KOP. と、ホソバミズゼニゴケ〕、福岡県牡鹿鐘乳洞〔湿った石灰岩上のシノブイトゴケ *Floribundaria floribunda* (DOZ. et MOLK.) FL.〕、福岡県千仏鐘乳洞〔水が滴る岩面のハリイシバイゴケ *Molendoa*

sendtneriana (B. S. G.) LIMPR.〕、大分県風連鐘乳洞〔濡れた石灰岩上のトサカホウオウゴケ *Fissidens cristatus* MITT.〕。

終りに、日頃から御指導をいただいている東京学芸大学小林弘教授、一部のコケの同定をしていただいた国立科学博物館井上浩博士、走査型電子顕微鏡の撮影について御援助いただいた日本歯科大学南雲保氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- BOCK, W. 1975. Distantes (Pinnularia-Bacillariophyceae) Eine kritische Zusammenstellung. Nachr. Nat. Mus. Stadt Aschaffenburg 83: 1-46.
- BOURRELLY, D. and MANGUIN, E. 1952. Algues d'eau douce de la Guadeloupe et dependences. CNRS, Paris.
- [CHIA-WEI, L. and YOUNG-MENG, C. 1977. The fine structure of the frustule of a centric diatom *Hydrosera triquetra* Wallich. Br. Phycol. J. 12: 203-213.
- CHOLNOKY, B. J. 1957. Neue und seltene Diatomeen aus Afrika 3. Diatomeen aus dem Tugela Flusssystem, hauptsächlich aus den Drakensbergen in Natal. Öst. Bot. Zeitschr. 104: 25-99.
- CHOLNOKY, B. J. 1968. Die Ökologie der Diatomeen in Binnengewässern. J. Cramer, Lehre.
- FOGED, N. 1959. Diatoms from Afghanistan. Biol. Skr. Dan. Vid. Selsk. 11: 1-95. pl. 1-13.
- FOGED, N. 1966. Freshwater Diatoms from Ghana. Biol. Skr. Dan. Vid. Selsk. 15(1): 1-169. pl. 1-25.
- FUKUSHIMA, H. 1950. 埼玉県新河岸川々跡沼の藻類第2報. 医学と生物学 17: 176-178.
- HUSTEDT, F. 1927. Bacillariales aus dem Aokiko in Japan. Arch. Hydrobiol. 18: 155-172.
- HUSTEDT, F. 1937. Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol. Suppl. 15: 131-295.
- HUSTEDT, F. 1942. Süßwasser-Diatomeen des indomalayischen Archipels und der Hawaii-Inseln. Internat. Rev. Hydrobiol. 42: 1-252.
- HUSTEDT, F. 1949. Diatomeen von der Sinaihalbinsel und aus dem Libanongebiet. Hydrobiologia 2: 24-55.
- HUSTEDT, F. 1957. Die Diatomeenflora des Flusssystemes der Weser im Gebiet der Hansestadt

- Bremen. Abh. naturw. Ver. Bremen 34: 181-440.
- HUSTEDT, F. 1962. Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. In Rabenhorsts, L. (ed.) Kryptogamen-Flora von Deutschland, Österreich und der Schweiz 7: 433-576.
- 岩城住江 1956. 豊平川の珪藻. 藤女子短大紀要 1956: 51-107.
- 岩城住江 1968. 五十鈴川の珪藻. 藻類 16: 21-51.
- LUND, J. W. G. 1946. Observations on soil algae 1. The ecology, size and taxonomy of British soil diatoms. 2. New Phytol. 45: 56-110.
- 奥野春雄・黒沢喜一郎 1959. 三段峡 および 八幡高原の珪藻. 三段峡と八幡高原総合学術調査研究報告 265-275. pl. 1-4.
- PATRICK, R. and REIMER, C. W. 1966. The diatoms of the United States 1. Philadelphia.
- PETERSEN, J. B. 1935. Studies on the Biology and Taxonomy of Soil Algae. Dansk Bot. Arkiv 8: 1-183.
- SKVORTZOW, B. V. 1930. Notes on Ceylon Diatoms 1. Ann. Roy. Bot. Gard. Per. 2: 251-260.
- VANLANDINGHAM, S. L. 1975, 1978. Catalogue of the fossil and recent genera and species of diatoms and their synonyms 5, 7. J. Cramer, Lehre.

千原光雄：中国における藻類研究の現状 (1) Mitsuo CHIHARA: Phycological research activities in China (1)

昭和56年1月半ばから2月初めにかけて、日本学術振興会の御好意と中国科学院 (Academia Sinica) の招きで中国に滞在し、幾つかの研究機関を訪れ、専門を同じくする人達と交流を深める機会を持つことができた。日中両国の国交が昭和47年9月に正常化されて以来、日本からの訪中者、中国からの来訪者あるいは留学生は年々増加の一途を辿っているが、日中間の共同研究のための人物交流は必ずしも盛んとは言いがたい。私達は、かつて多くを学んだ中国について余りにも知らないことが多いといえる。日本学術振興会においては、日中の共同研究について深い関心を持たれ、昭和54年より、中国科学院との間に日中共同研究のための研究者交換制度を発足させ、日本からの研究者の派遣と中国からの訪問者の受入れに努力されている。今回の私の訪中の課題は、中国の藻類研究の現状を視察し、将来の日中間の共同研究のための資を得ることであった。滞在期間が3週間の予定であったので、私は訪問する主な研究機関として次の4つを選んだ。すなわち (1) 国立植物研究所 (北京), (2) 国立海洋研究所 (青島), (3) 国立水生生物研究所 (武漢), (4) 国立華南植物研究所 (広州) である。これらの機関はいずれも中国科学院に所属する。

以下、藻類に関することを中心に、中国における研究活動の現状の一端を報告したい。この小文が日中間の今後の藻学研究に役立てば幸いである。なお、掲載誌の都合上、この小文を幾つかに分割することをお許しを願いたい。

稿を進めるに当たり、訪中の機会を与えて下さった日本学術振興会と中国科学院に厚くお礼を申し上げる。

1. 中国科学院植物研究所 (北京) Institute of Botany, Academia Sinica (Peking) 北京西直門外大街 141 号

この研究所は当初は植物分類研究所として発足したが、その後機構が変り、現在は10研究室、職員数約400名をもつ植物学の総合研究所となっている。それぞれの研究室名と研究者等の数を記すと次のようである。

- 1) 植物分類研究室, 総職員数69名 (内 研究者及び技術者の数60名),
- 2) 古植物研究室, 29名 (23名),
- 3) 植物生態研究室, 45名 (39名),
- 4) 植物化学研究室 40名 (35名),
- 5) 植物形態研究室 21名 (14名),
- 6) 植物細胞研究室 24名 (20名),
- 7) 生物固気研究室 (窒素固定研究室) 25名 (20名),
- 8) 光合成研究室 36名 (25名),
- 9) 植物生理研究室 50名 (45名),
- 10) 植物誌編纂室 7名。